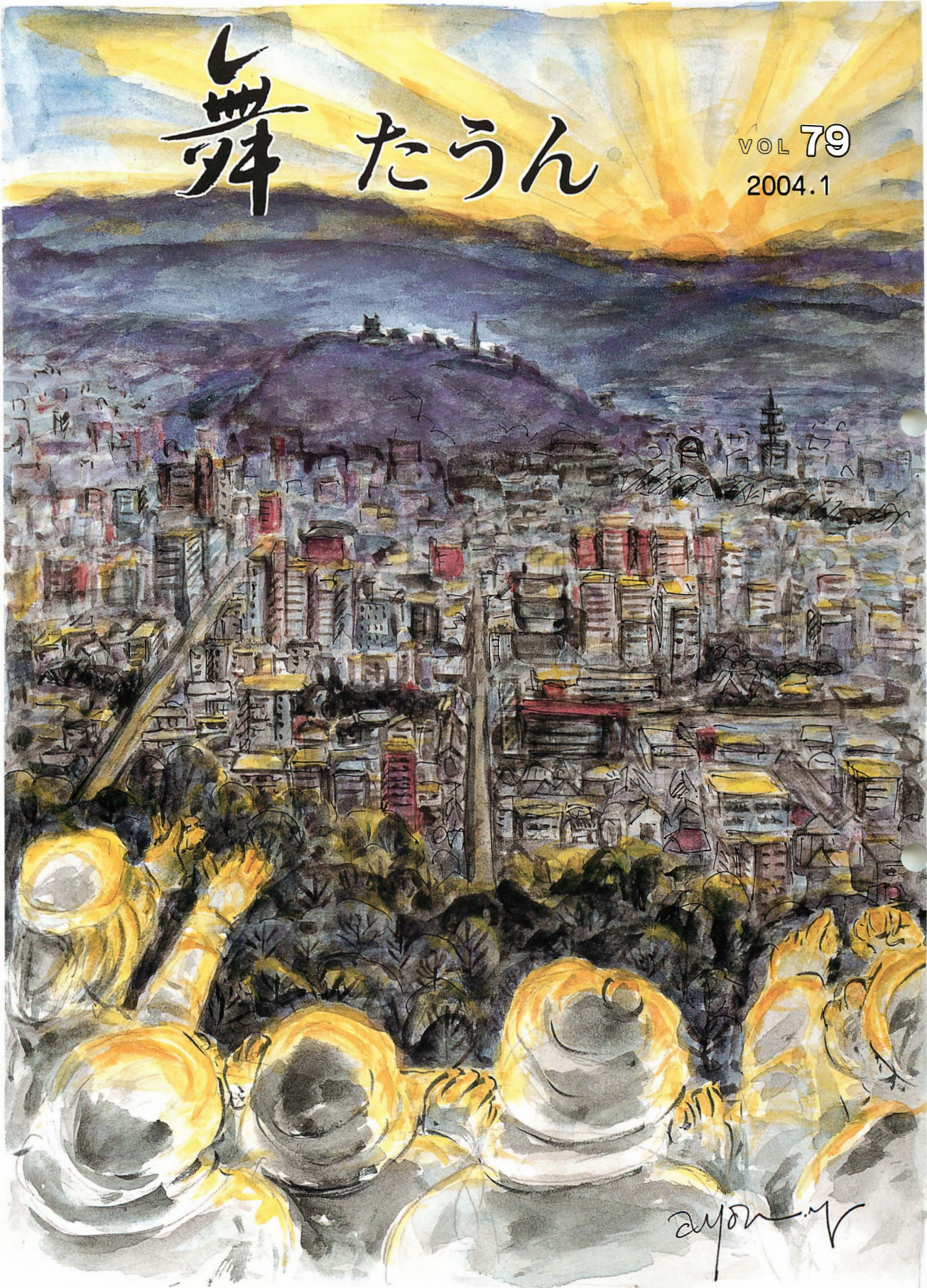


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 79

2004.1



ayon

アングル

地域の宝を外者が掘り起こす旅の演出

長野県飯山市「なべくら高原・森の家」／木村 宏 …… 1

特集

『U・J・Iターナー者の視点でまちづくり』

本当にやりたい暮らし・伝えたいものを求めて 内子町／中谷 信弘 …… 2

私の第二のふるさと松野町 松野町／高柳 里絵 …… 4

まちづくりは明るく・楽しく・役に立つ 久万町／リチャード/J/W …… 6

環境問題を農業から考えよう 上浦町／越智 資行 …… 8

弓削島にゆげロツジあり 弓削町／今井 裕和 ……10

キラリ光るまち

地域活性化をめざす「籠ふるさと塾」の取り組み

和歌山県那智勝浦町／浦 勝良 ……12

論談—まちづくり—

防犯とまちづくり

松山大学法学部助教授／柳川 重規 ……14

引き算型まちづくりの事始め(十)

内子町／岡田 文淑 ……16

トークナウ

研修をふりかえって 今治市／北川 猛 ……18

ふるさと 三間町／清家 朋代 ……19

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足ラテス

レクイエム青木ビル ～八幡浜市旭町～ 岡崎 直司 ……20

媛のかわら版

えひめのがんばるママの応援団!! (その1) 松山市／山本由美子 ……22

風おこしのちかい

「岩松モデルは町並み保存」から 津島町／森田浩二 ……24

研究員レポート

町中が「食の博物館」～宮城県加美町～ 橋岡 勝一 ……26

information センターからのお知らせ & BOOK INFORMATION ……28

特集

「U・J・Iターナー者の

視点でまちづくり」

地域づくりを進める上での最重要課題は地域に愛着を持って、地域のために行動する人をどのように確保・育成していくかとも言われている。地域での人材不足が嘆かれる中で、地域に人材は本当にいないのだろうか。地域に人材は、埋まっているけれど、それを発掘出来ていない可能性もあると思う。

その中で注目すべき人材がU・J・Iターナー者であるように思う。外からの視点と地域への強い想いを持った人達であり、地元の人が「こんなものつまらない」と見過ごしているものでも、地域の資源として新鮮な視点で捉え、地域に新しい風を起している。

このように地元以外での経験を持つ人の視点でのまちづくりに焦点をあて特集を組みました。(編集子 梅村)

表紙の言葉

私の初日の出はお手軽コース。裏庭と称するは、松山総合公園。東に松山城、登るに連れ小宇宙を感じる。

この山一つで大晦日には除夜の鐘を打ち、八幡さんで初詣をして、夜が明ければ松山城の右奥からの初日の出を拝む事が出来るのです。

暗がりにポーツと差した日の出に拍手。体を受けた光は暖かい。一年のエネルギーをもらって、平穩無事を祈り、散歩道を下る。

松山総合公園

柳原 あや子





地域の宝を^{よそ}外者が

掘り起こす旅の演出

長野県飯山市「なべくら高原・森の家」

支配人 木村 宏

長野県飯山市はスキー観光で盛り上がりつつある頃があります。四国のお客さんもバスや電車を乗り継いで信州のスキー場にこぞってご来場いただいていた時代、我らの町はそれなりに元気でした。平成に入り、その様相が一変しました。レジャーの多様化、趣向の変化、様々な要因が挙げられますが、要するにスキーのお客様の減少は今もなお歯止めがきかず、冬頑張れば何とか一年を過ごせる時代はまさに泡のごとく、いにしえの話となりました。本来、冬の四ヶ月だけ頑張れば一年暮らせるなんて虫のいい話はありません。アリとキリギリスではありませんが、せつせと働いて小さな幸せをじっくり築きあげてこそ、年季が入り味がでるってものでしょう。「年季と味」こそ旅する者にとっては安心と信頼の裏返しではないでしょうか。我が町は、雪に頼って待つお客様の受け入れから「年季と

味」を商品として売る旅へと、衣替えをはかり始めました。「なべくら高原・森の家」は、町に三百余りある宿泊施設と共存し協調し、地域の宝を商品に変え、あるがままの農山村の姿を売り出す施設として七年前に開業しました。地元の住民が関心を寄せない裏山の散策、荒れた田んぼのボランティアによる再生、年寄りが培ってきた匠の技術の発見や継承、自然資源を生かしたレクリエーション、すべてが埋もれている、または埋もれつつある我が町の古くて新しい旅の商品なのです。この商品は掘り起こしと演出が必要です。灯台もと暗し、猫に小判、意外と地元の人には商品価値を見いだせないのもまた事実。森の家はそんな演出者を、地域外の若者に委ねています。県外の若者が六名、私を含めれば常駐スタッフ九名の内七名までが県外の出身者。過疎の進んだ小さな村の空き家をめぐらに、ある時

は村の長老の話に耳を傾け、外者の感性で野山を駆け回り、そして考え、意見する。お客さんに喜んでいただくためのネタ探しは、日々の生活の中から生まれます。道普請は村人だけでやると大変だからお客さんにも一緒にしてもらおう。日がな一日家で丸くなっている村の爺さんや婆さんを引っ張り出して体験講座の匠に仕立て上げる。都会の人と村の人、考えや生活スタイルに違いはあれど、互いの生活を尊重しつつ彼らが作った商品を介して交流が始まりました。警戒心の強い村人とあれやこれやと移り気な都会の旅人の仲介役は、そう簡単な仕事ではありません。外者が自分で決めたその地に思いを込め、立ち去りがたいと愛惜しむようになったとき、本当の商品が生まれる。そして共感者を得るのです。

農村の年季と味、かめばかむほど味わい深く奥深い。もつともつと掘り起こす。外者の仕事は日々積み重なって年季を帯びる。まもなく十年一区切りの成果が見えてきそうな、そんな歴史が築かれました。移り住んだ町が自慢に思える若者が森の家にいる。信州最北の町、飯山はもうすぐ雪に覆われます。

本当にやりたい暮らし 伝えたいものを求めて



内子町
自然農園

中谷 信弘



はじめに

息子達に「何を伝え、何を残せばいいのだろう?」そんな思いですと過ごした三十代から四十代。そしてそれは、「自分の生き方は一体どうなんだろう。本当にやりたい事はなんだったのか?」といった問いに辿り着いたのでした。

その頃、十坪ばかりの家庭菜園を始めていて、農業書を求めて、とある書店に立ち寄った折に目に付いたのが、福岡正信氏の自然農法「わら一本の革命」でした。早速、本を買って、読み進んでいくうちに、すっかり夢中になり、気がつけば福岡氏の著書、数冊を立て続けに購入し読んでいました。そこには私が少年時代に漠然と描いていた幸福観が農業を通して描かれていたのです。それから、家庭菜園の栽培方法も変わり、土を耕さず、草を伸ばしたままの自然農法の真似事が始まりました。そして日々、夢中で過ごす中に、ふと懐かしい思いが胸をよぎったのです。それは心の奥に深くしまいこんで忘れ去っていた少年時代の夢だったのです。「そうだ、自分が本当にやりたかった事はこの事だったのだ!こんな暮らしがしたかったのだ!」・・・その後、自然の中での農ある暮らしと息子達、次

世代へ残すべき、理想郷作りへと進んでいきました。

自然農法による自然界の営みとの出会い

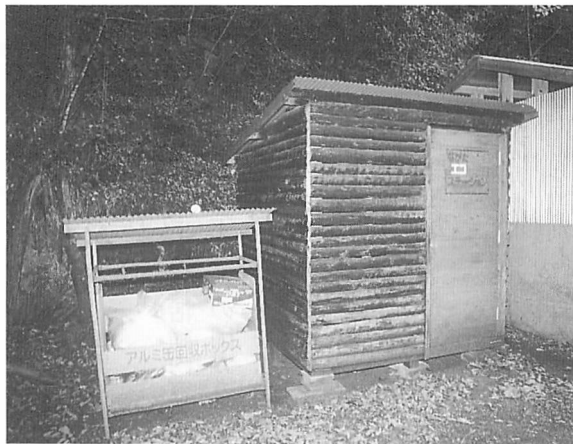
農業を始めた頃の我が家の畑は、本当に最悪でした。不耕起栽培なので、苗を定植する際にだけ鍬で穴を掘りますが、ツルハシ用いなければならぬほどの硬い土でした。しかも、苗は定植して三日も経てば、半分くらいは虫に食われてなくなるという始末です。以前タバコ畑だったので、土壌消毒により微生物が死滅しているのでしょう。それが十年を経過した現在では、耕さなくても手で穴が掘れるくらいの温かな優しい土になっています。もちろん、苗を植えても100%近く食われる事はありません。当初はバツタを始め、コオロギ、ナメクジ、アブラムシ、と次から次へと大発生しましたが、耕さず、農薬を使わず、草生栽培に徹していくと、次々にそれぞれの害虫に対して天敵が現われ、数年の後には特定な虫だけが天敵生するという事はなくなりました。畑全体が天敵の住処となりました。大きな作物を大量にとった人間の欲をはずして、そこに棲息する土壌生物や植物にまかせれば、自ずと棲み分けをしてバランスがとれ、より虫害の少ない畑に

なるといった事が分かってきます。野菜作りの面白さは作物を育てるだけでなく、自然界の営みとの出会いや、常識や固定観念を取り払ってくれるような発見があり、楽しさが尽きる事はありません。

身近な問題の解決こそ地域再生への糸口

私の住む地域に「お山の喫茶店」といって月1回地域の高齢者の方たちが集まって昼食を共にし、数時間雑談をして過ごす場所があります。もうすでに三年くらい続いているでしょうか。キッカケはある日、私が隣部落の女性から、うちのおじいちゃんが「淋しい、死んでしまいたい」としきりにこぼすんです、と聞いたことでした。山間部はご近所があっても離れていて足の弱った高齢者にとっては話し相手もままならぬものです。他にも車に乗れる高齢者の方で、パチンコ屋によく行く人がいます。「パチンコが好きなんです」と話し掛けると、「パチンコはお金も使うし、良くないのは分かっているが、話し相手がいるから行くんや!」とのことでした。それならば、地域で幼馴染の人が集まってひと時を過ごせる場所が作れないだろうか?例えば、「お山の喫茶店」のような場所をと提案したのがキッカケで生まれました。その

他にも、家庭から出るナイロンゴミなどが野焼きされていたのを、有料のゴミ回収袋をご近所を持って回って分別をお願いした事が始まりで、地域全体に広がり、行政の山間部へのナイロンゴミ回収へと広がっていきました。後日、行政の方から「皆さんの活動が行政を動かしました」とメールをいただきました。



地域の分別回収をきっかけに出来たゴミステーション

一人一人の暮らしづくりが地域づくり

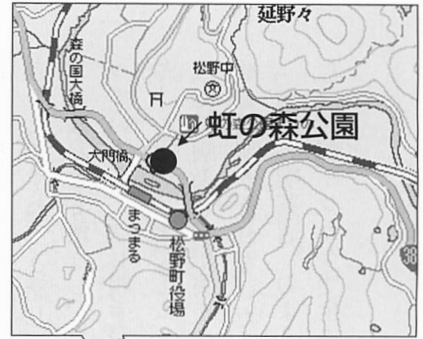
「高齢化・少子化」の言葉は、昨今どんな話題の中でも取り上げられるほど、切実な問題になっています。我が家のように山で暮らしていると、世間で言われ

ている以上に恐ろしいほどの現実を実感しています。私が内子町に移ってこの十年で、地域はすっかり様変わりしてきました。耕作放棄地が増え、農業をリタイアする人、亡くなっていく人、独り暮らしの家庭や後継者のいない家庭が増加、又、小学校は廃校が決定と、明るい展望がありません。打開策としては、とにかく地域の後継者を増やさなければなりません。そのためにも、田舎暮らしを希望するU・J・Iターナーを多く受け入れなければ、地域を維持できない日が近いかもしれません。又、これから人口が減少していく中で、従来のような地域おこしといえば、何か大きなイベントを行って都市の住民との交流を図るといった図式では、今後行き詰まるのではないのでしょうか。私は少人数でも一人一人が本当にやりたい事や本心に望む暮らしを認識し、それらを実現すべく努力をしていく、又、他の人もそういった個人の能力や思いを活かして助け合って協力し合うような共同体にならなければ、地域の再生はないのではないかと思います。一人一人の元気な暮らしが、元気な地域づくりにつながっていくのだと思っています。そして、私はそんな暮らしづくりのお手伝いをしていきたいと思っています。

私の第二のふるさと 松野町



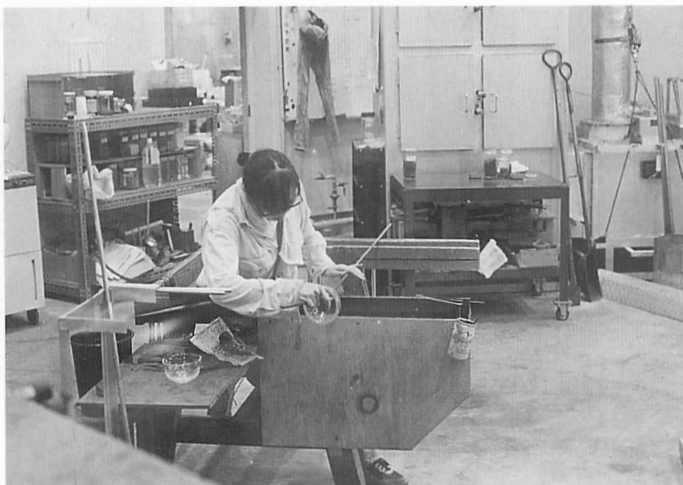
松野町
虹の森公園・森の国ガラス工房
工芸員 高柳 里絵



「おう、四国か。いいなあ。すぐ遊びに行くから。」私が愛媛に就職したいと言った時の父の答えです。「こんなに簡単に決めていいのか!」と、こっちが不安になったほどです。私にとってガラスは、幼い頃から夢の一つでした。埼玉県の高校を卒業後、神奈川県にあるガラスの教育機関を経て、松野町の森の国ガラス工房に勤めてはや五年。松野弁も大分解るようになりました。

ここでまず、当工房の活動内容を紹介させていただきます。森の国ガラス工房は、その名の通り自然豊かな松野町の町営施設として、平成四年に設立。七年前に現在の場所に移転し、「道の駅・虹の森公園・森の国ガラス工房」として活動しています。当工房の一番のうりは、「リサイクルガラス」です。松野町から出る空き瓶は年間九十トン。その中から無色透明の瓶だけを選別し、洗浄、粉砕、ふるいにかける……。このような手間のかかる作業は、ガラスを吹く工芸員以外の方がします。いわば縁の下の力もちです。私達工芸員が、その有難いリサイクルカレットを年間約三トン前後使用し、リサイクルガラスを生み出しています。手間とひまをかけ、古いものに新しい命を吹き込む、一人ではできないこの行程

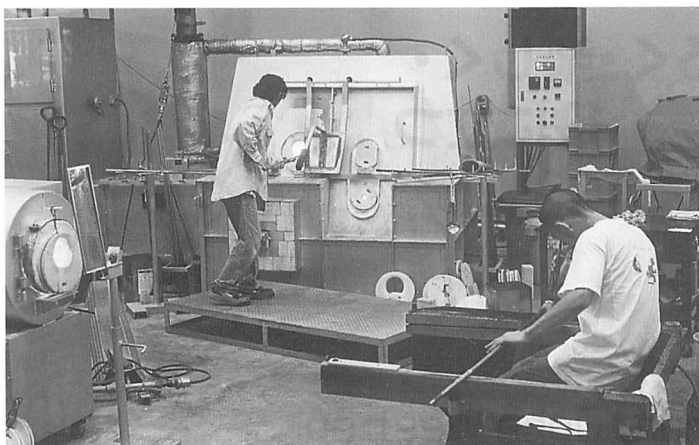
を、私は大切な事だと思っています。初めは仕事を覚え、こなす事に精一杯で、リサイクルにあまり興味がなかったのですが、今では透明瓶以外にも、森の国ホテルから出るワインの色付瓶のリサイクルにチャレンジしています。森の国らしい、きれいな緑色のガラスが出来て、うれしく思います。



ガラスの形を整える高柳さん

この他には、平日に「吹きガラスの実演」、週末に「ガラス工芸教室」、ガラスに絵付けをする「サウンドブラスト体験」、期間限定でG・Wや夏休み等に実施する「吹きガラス体験」が主な活動内容となっています。

私の初めての一人暮らしの場所になった松野町。やっぱり、私の生まれ育った埼玉県と違うところが沢山ありました。まずは、自然に囲まれたこの環境。素敵すぎるぐらい、四季を感じながら生きて

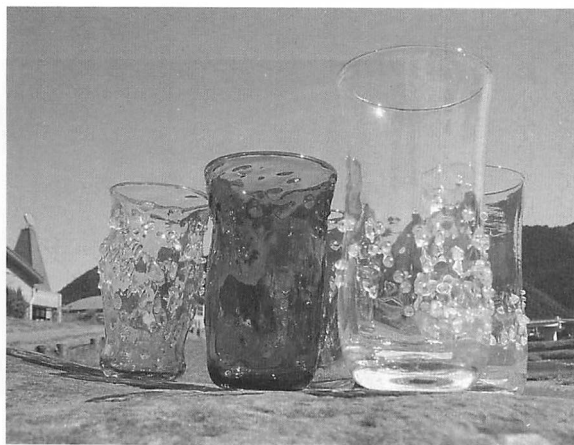


ガラス工房の作業風景

います。私の夏の行事で欠かせないのが「ホタル御行」。自分で勝手にそう呼んでいるのですが、ホタルの時期になると毎晩ホタルスポットに足繁く通い、一番きれいな時を見るのです。幼い頃、家族旅行で東北にいった時に一度見ただけだったので、こんなに身近に、しかも毎晩見られる松野の自然の豊かさに感動しました。木々の間を抜ける不便な山道も、単線一両のかわいいワンマン電車も、おいの密度の濃い空気も、そして、ホテルも・・・。「人間が不便さを受け入れることで守られる自然というものがあるんだ」と感じました。

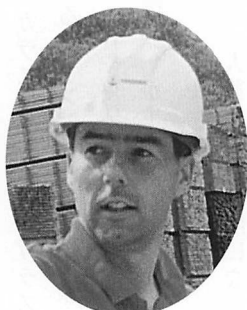
また、松野に暮らす人々の気質にも違いを感じました。とにかくみんなおもしろい。みんな話が大好きで、冗談ばかり言うので、私も笑わされてばかりです。よそから来た私を心配してくれて、いろいろ親切にして頂きました。野菜やお茶をわけてもらったり、ストーブを譲ってもらったり、家で作ったおかずを、おすそわけしてくれたり、「何かあったら言いきいやー。」と言ってくれます。「方言ってあったかいものなんだなあ」と思いました。こうした人とのふれあいがあるこそ、長く居られるのかもしれない。仕事場以外の友達も沢山出来ました。世

間は狭いもので、まったく違う繋がりの人達が、実は知り合いだったということが多々あり、またそこで違う輪が生まれたりして、おもしろいです。就職の話がなければ、きっと訪れる事も無かったかも知れない松野町に、私が今いるのは、文頭の父の一言のおかげだと思っています。予言どおり、両親は年に二度ほど松野に来て四国を満喫しています。松野の自然に囲まれて生きること、いい人達やリサイクルガラスに出会えたこと、何より、ガラスをさわっていられること。全てのいい偶然に恵まれたことに感謝しつつ、日々生活してゆきたいです。



リサイクルガラスから生まれた作品

まちづくりは明るく・楽しく・役に立つ



久万町
久万広域森林組合
Richard John Westrop
リチャード・ジョン・ウエストロップ

地域と関わるきっかけ

イギリスのコッツウオルズから久万町に来て早いもので十年が経ちました。日本に来るきっかけは、自分の視野を広げ、いろいろな経験を積むためにきました。英語の教師として五年間、アグリピアの就農支援施設で二年間、そして現在、久万広域森林組合に三年勤めています。

これまでも地域での活動に興味を持ち参加していましたが、町内会の班長を引き受けることをきっかけに、これまでの例年の行事に加えて、何か新しいことをしたいと思うようになりました。班長になってみると、例年の組の行事には溝掃除や道修理など、大切なことではあるけど義務的なことや楽しくないことが結構あることを実感しました。そこで、昨年は「楽しく・明るく・役に立つ」をテーマに、組の活動を進めることに決めました。

久万町を知ろうバスツアー

班のみんなに呼びかけて、自分の住んでいる町の産業や町が力を入れている事業のことを知ってもらうために、貸切バスで「久万を知ろうバスツアー」を企画しました。町の基幹産業は農業と林業であり、町内に住んでいるから知っているけれど、実際には見たことがないところもあり、新規就農支援施設のアグリピア



久万広域森林組合管理棟の前で記念撮影

や私の勤める久万広域森林組合の木材加工施設、そして新しく木造で新築された父二峰小学校を周りました。初めて新しい小学校を見てビックリする人、生徒が少なくなっている現実などいろいろな発見があり会話も弾みました。

そして、このツアーをするもう一つの目的は組のみんなが一台のバスに乗り、親睦を図ることにあります。お弁当を持ち込んでみんなで食事をして、楽しく交流を図ることでした。

ちょうどその頃、日韓共同開催のワールドカップサッカーが開会前であり、サッカーを楽しみながら親睦を深める話題づくりのために、バスの中でくじ引きをしました。ワールドカップ出場国の名前を書いたくじを作り、全員がくじを引いて、当たった国を応援するというものです。

「応援することになった国はどこにあるのか」など話は広がり、ワールドカップ開催中は組を挙げてそれぞれの国の応援で盛り上がりました。「時にはしっかりと応援していますか」と尋ねたりもしました。私の自宅の前にはトーナメント表の掲示板を作り、試合の結果を掲示しました。決勝戦は大型テレビを借りてきて、みんなに集会所に集まるよう声を掛け、楽しく観戦しました。組のみんなで共通の話題を作り、親睦を図るよい機会になったと思います。

筋肉トレーニング「寝たきり予防」講習会の開催

久万町では地域コミュニティ活動推進モデル事業があり、そこで、この班で何か出来ないか考えました。久万町全体もそうですが、班内は高齢者の方が多いので、その方たちに役に立つことをしたいと思い、たまたまNHK総合テレビで見た「筋トレで寝たきりを防げ」という筑波大学と茨城県大洋村の共同プロジェクトのことを思い出し、早速講師の久野譜也先生にコンタクトを取り、講演に来て頂きました。

年齢が進むと筋肉は細くなり、足が弱ってきます。何かのきっかけで、転倒し骨折すれば、病院のリハビリを受けなければなりません。

ればなりません。また、そのリハビリ中に寝たきりにもなるケースも少なくはありません。そして、中でも、脚を引き上げる大腰筋が重要で、それを中心にトレーニングすることが効果的という事を知りました。この時の講演会には、班内の方を始め久万町内外から多くの方が聞きにきました。

その講演会のあと、班の方を中心に集会所で、簡単なストレッチのプログラムを組み、週に一回集まりました。大きな特別な器具を使わず、簡単な体操が家でもできることは、お年寄りにとって大変魅力的なことではないでしょうか。

このプログラムに興味を持った行政は今年は町内の別の地区で同じテーマでこの活動を進めるそうです。

この地域コミュニティ活動推進モデル事業は、行政からの案ではなく、その地域に住む町民によるアイデアを生かして予算を組み、行政から補助が出る仕組みになっています。自分の地域に根ざして、本当に役に立つことをしていけます。そして、行政に対しても、働きかけることができます。

外からの視点で

私は木材の営業担当をしているため、西日本の色々な地域をまわる機会があり

ます。そこで、とても残念に思うのは、列車から見る住宅街の風景はどこも同じで、どこも似たような家が建てられていることです。日本の住宅は三十年、四十年で建て替えられてしまい、その地域にしかない個性ある建物が壊され、その代わりに大手住宅メーカーの画一化された住宅が建てられています。地域の個性ある町並みは残していかないのでしょいか。

私の生まれたイギリスは石文化であり、その地域のある石材で家が建てられています。地域によって石材が違うため、地域ごとの町並みに地域らしさがあります。家は古いものになると二百年、三百年経っていて大切に使われています。そこには厳しい町並みの規制があり、たとえ新しく電化住宅を建てても屋根に煙突を付けなければ許可がおりません。町並みの景観を守るためには、規制があるのは当然なことです。その景観を守ることが地域の誇りになっていくからです。

一方、久万町には木材文化があり、久万町にしかない伝統的な木材建築の町並みを作ってほしいと思います。久万らしい町並景観の規制をかけても、久万にしかない町並みが出来てほしい。「ぜひ久万に来てください。」と誇りをもって言えるような地域になって欲しいです。

環境問題を農業から考えよう



上浦町
有機野菜栽培グループ「家庭菜園」

代表 越智 資行



就農へのきっかけ

広島県の尾道市から今治市までは、一本の道でつながっている。しまなみ海道である。その行程中、最大の島が大三島。その島の東側、上浦町にある父親の実家が空き家になることを知り、平成十年の春に、大阪市内から家族全員でイターンすることを決めた。

子供の頃から自然志向が強く、自然環境に対する関心を強く持っていた。高校を卒業後、関西の大手企業に就職したが、仕事ばかりで子供の顔も満足に見られない生活にストレスを感じていた。いつしか、便利さばかりを追求し、一番大切なものをなおざりにしているような社会風潮に対する疑問がつのり、満たされたはずの日々の中で、どこか幸福の実感が薄れていることに気がついた。

そこで、満たされない環境のなか、国を作ってきた父親たちの世代を体験したくなり、思い切って会社を退職して、青年海外協力隊に志願し、フィリピンでの職業訓練学校で電気機器の制御技術指導のための教材づくりに携わった。現地での貧しくても助け合って心豊かに暮らす人々に触れて、これまで自分が抱いていた幸福感に疑問を感じるようになった。

そして、驚いたのがフィリピンでは日本企業が自然環境を壊してまでビジネスをしていることだった。日本にエビを送るため、マングローブの森を破壊し、エビの養殖を行っている。しかも現地の人は、その恩恵にはあずかれない。どこかおかしいと思うとともに、環境と共生で生きる暮らしを次第に志すようになった。

この二年間の経験で、自然環境に対して、広い視野で自分ができることを考えるようになった。会社の余暇を利用して環境の専門学校にも通うようになり、「自然は先祖から受け継がれたものではなく、子孫から借りているもの」という言葉を知り、明日のために今できることを考えた。

幅広くたくさんの人に、自然や環境を身近に感じてもらうには旬の食物であり、それは、農業であること実感し、就農することを決めた。

ゼロからのスタート

上浦に来て農業を始めたが、畑もなく道具もないゼロからのスタートだった。もともと家庭菜園程度の土地はあったが、荒れ果てていたため、開墾から始まった。自分の背丈以上の雑木も混じる草むら、それはすごい土地だった。その土地を耕

しながら、借りられる土地を探した。島にはまとまった面積の畑はなく苦労したが、たくさんの人の協力により、みかん畑と野菜畑を合わせて五反の土地を借りることができた。もちろん、そこもすぐには収穫できるような土地ではなく、初めの一年間は畑の土作りと農具の準備に追われた。

そして、就農して一年が経ち、平成十一年しまなみ海道が開通した春、産直野菜「おし売りおまかせパック」と称した我が家の野菜たちが、お客様の元に届くことになった。今と比べると、形も不揃いで虫食いの跡もあったが、一般的に有機無農薬野菜は虫食いがあって当然という意識があり、少々傷や虫食いがあるものの方が安全だという気になっていた。しかし、本当に健康に育ててやれば、野菜たち自身の力で虫を寄せつけないほどの強さで育つことを知り本当に驚いた。

野菜から自然環境へ

初めから「越智家の野菜たち」を食べてくださったっているお客様は、私達と一緒に発見や驚きを共感している。そして、その人達の口コミでお客様は増え、現在は六十五の家族に直接小包で届けている。私たちは、野菜を食べてもらうために

けに育てているわけではない。農業を理解し体験し、食べてもらうことで、人も自然も健康になれるという思いも育てている。

「食卓に四季の自然を！」をスローガンに、作物が育つ自然環境、育てる側の気持ちなどを野菜にのせてお伝えしている。環境問題は、自然離れた日常生活に原因があると思う。だから野菜と一緒に送っている「瀬戸の百姓通信」には、畑の様子や作物の生育状況、大三島の自然点描をまとめている。届いた野菜から自然を感じてもらいながら、自然環境の大切さも感じてもらえらるよう。それは作る人も食べる人も同等であるという意識のもと、よりおいしく食べてもらうために作っている。

また、グリーンツーリズムにも取り組んでいる。環境を保護するNPOの企画する農業団体の受入れや野菜のお客様の産地見学など、実際に自然にふれ、その大切さを実感して頂いている。



瀬戸の百姓通信

これからの展開

消費者に安心安全な野菜を届ける取り組みが、地域の人々にも賛同をいただくことになり、有機野菜栽培グループ「家庭菜園」を平成十五年二月に結成した。地元の農家を含む主婦中心の十七名のグループである。自然の力を利用し、自分が食べておいしい旬の野菜のみを共同出荷する。島の自然を守り、自然と共生した作物の栽培、そして子供たちが育つ明日のために運営することを目的としている。



家庭菜園の有機無農薬野菜

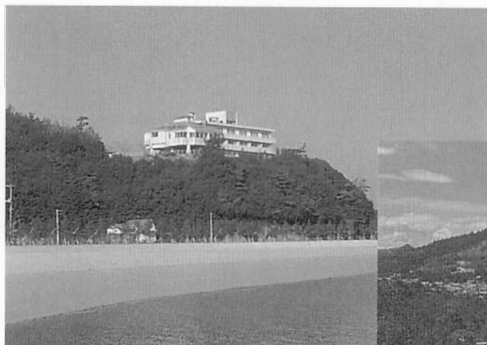
また、上浦町は現在、「環境にやさしい島」として有用微生物群（EM）による環境浄化活動が地域に広がりつつあり、この動きを持続、発展させるため、「大三島愛ランド自然倶楽部」の立ち上げを進め、地域全体での環境活動に広げたい。豊かな自然を子供たちに伝えるために、農業から自然の大切さ、環境問題の意識を高めて生きたいと思っている。

弓削島にゆげロッジあり

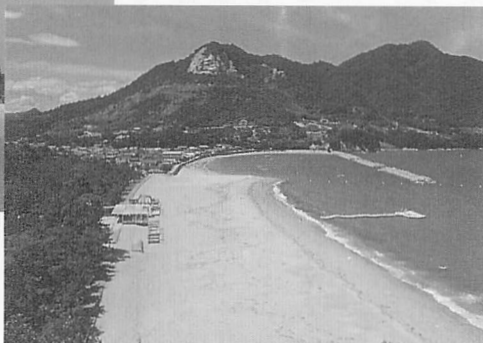


弓削町
国民宿舎ゆげロッジ

支配人 今井 裕和



高台に建つゆげロッジ



ゆげロッジから見た松原海岸

「国民宿舎ゆげロッジ」は越智郡弓削町にあります。燧灘を眼下に望む小高い丘の上に位置しています。またすぐ横には、法王ヶ原という全長二百メートル程の松林があり、朝には海から朝日が昇り、それはもう景色は最高です。瀬戸内でも、中央部に位置するこの弓削島からの景色は、他とは一味違います。

「国民宿舎ゆげロッジ」は現在弓削町の第三セクターで(株)ゆげフーズサービスが経営を委託され運営をしており、私はそこで支配人を任されております。

なぜ私がこの島に帰って来たかと言うとまずは、ゆげフーズの経営者が交代し、現社長である叔父に声をかけられ、もともと接客業が好きであったので、「一緒に頑張っていこう。」ゆげを盛り立てよう」と強い意志を持ち帰って来ました。

私は十年近く大阪に住んでいましたが大学・就職・結婚ともう一生大阪で生活すると思っていました。仕事も自営で半導体関係の機械の組み立て・メンテナンスをしたりしてましたので、まさか田舎に帰って仕事をするとはいえませんでした。しかし、考えてみると心には帰りたいたと言いう気持ちがあったと思います。今は帰ってきて良かったと思います。しかし問題もあります。

一つは、少子化の問題です。弓削島は、現在四千人弱しか人がいません。その三割以上が高齢者です。どんどん人口が減ってきています。自分の子供たちの同級生は、二十名弱で私たちの世代の五分の一です。このままでは団体競技などは難しくなるでしょう。しかし、良い所もあります。この自然あふれる地で育つこと

は、大きな財産になると思います。いろいろなことを子供たちに教えてあげたいと思います。

二つ目はこの自然です。まだまだ自然は残っていますが、一番大きく変わってきているのは、「海」です。この島の海が、だめになってきています。これは私たちの経営にも大きく響きます。多くのお客様は、弓削に地魚を求めて来られます。その魚が捕れなくなっています。春から夏までは、まだ捕れますが、それでも以前に比べれば激減しています。それと小魚・貝類が捕れなくなりました。地魚でも、この辺りは小魚の方が喜ばれますが現在、当社でもその確保に苦労しています。その原因としては、やはり埋め立てや砂浜の砂の増量などでの地形の変化ではないでしょうか。最近では、貝や魚を復活させようと住民も動き出してきました。

三つ目の問題は、目玉商品がないことです。なんとかして他にはない物を生み出したいのですが、それには瀬戸内の小魚が大変重要になってきます。そのままの素材でも十分に楽しんで頂けるのに、それが不足しているという事は、本当に悲しいことです。お客様は、魚が豊富であると思っ

早くなんとかしていきたいです。

四つ目の問題としては、仕入れです。物価の高さにはびっくりしました。また都会のように欲しい食材がすぐに入りません。このギャップは大きかったです。今でこそ少しずつ改善されてはきていますが、早く色々な流通経路を生み出して生きたいと思います。

五つ目の問題としては建物です。老朽化も進み、あちらこちら不具合が出て来ております。また、お客様も高齢者の方がかなり多く、当宿舎にはエレベーターが付いておらず、付けてもらいたいという声が多く聞かれます。しかし、建物は町の施設ですのなかなか難しいのですが、早急に解決していかなければなりません。問題点・改良点は山積みですが、「ゆげの観光の拠点」として強い意識を持ちながら頑張っていきたいと思

問題点ばかり述べましたが、当宿舎にはいい所もたくさんあります。部屋から見る朝日は、燧灘を望みながら、これももう見事な朝日です。夕日も隣の生名島へ消えて行く、これもまた綺麗です。

また、食事毎月変わる四季折々の味が楽しめる会席料理も自慢です。一番いい季節としては、春から夏にかけてです。魚も取れるし、気候もいいし、春頃には、

山を歩けば山菜もあるし、夏は海で海水浴と最高です。また年中通して釣りも楽しめます。癒しの島と言っても過言ではありません。

これから、もっともっとお客様のニーズに合った宿舎をめざし、「弓削島にゆげロッジあり」と言われるよう、国民宿舎でもこれだけできるぞという所を見せたいと思います。



ゆげロッジからの朝日

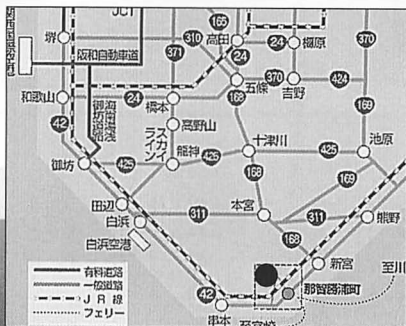
地域活性化をめざす

「籠ふるさと塾」の取り組み

那智勝浦町

新規就業者技術習得施設 「籠ふるさと塾」

事務局長 浦 勝良



色川の中心地大野地区、61世帯のうち19世帯が「ターンし定住している。

色川地域の概要

「籠ふるさと塾」の活動地域である色川は、和歌山県の南東部に位置する那智勝浦町の内陸部にあり、海拔八百メートルの山々が連なり、標高二百から四百メートルの急峻な山肌に集落を形成している農山村地域であります。年平均気温は十七度、年間平均降水量は三千ミリの高温多雨地域です。

本町のシンボルである「那智の瀧」の源に位置する色川地域は、九集落からなる旧村で、かつて鉱山の町として栄えましたが、鉱山の閉鎖と林業不況により、著しい過疎化が進んでおります。また、高齢化も進み、この地域の特産品である緑茶を生産する「色川茶業組合」でも、

生産者の高齢化と後継者不足のため、「色川茶」の生産、美しい茶園の景観保持、管理が危惧されており、将来に危機感を強めつつあるのが現状です。

地域活性化に資する取り組み・活動

昭和五十二年から、新規就業者の受入れが色川地域において始められました。平成三年には、受入れ態勢を強化するため、色川地域振興推進委員会が結成され、委員会の中に新規定住促進班、実習受入班、体験受入班、ふるさと塾運営委員会を編成しました。

新規定住促進班は、農地や住宅の確保など受け入れ態勢の充実により、一層の定住者の増加を図り、地域の後継者作りを促進しています。

実習受入班や体験受入班は、農林業の実習を通して農林業の基礎を学ぶための活動や農村体験活動を行っています。

また、ふるさと塾運営委員会は、新規就業者（定住者）が地域の実状を知るために、宿泊したり農林業実習を受けるにあたって、長期間入居できる籠ふるさと塾（新規就業者技術習得施設）の運営を担当しています。

取組みに至る背景と経緯

当地域は昭和二十八年当時には、人口

は約三千人であり、農林業や鉱山従事者等で村は活気に満ち溢れていました。昭和四十年頃から、林業の衰退、鉱山の閉山、住民の高齢化等によって休耕田の増加や山林の手入れ不足に悩まされる過疎の村となり、このまま推移すれば、地域社会の崩壊につながりかねないと危機感が深まる中で、昭和五十二年から新規就農者定住の受入れが始まりました。平成三年には、より強力に地域の活性化を図るため、地域有志が参画して推進委員会が結成され、今まで個人的に続けてきた新規定住者や就農希望者の受入側を組織化しました。町としては、この活動拠点として、旧小学校を改修して、町立籠ふるさと塾を開設しました。

活動上の特徴

新規定住者や就農希望者の受入側として組織した推進委員会は、籠ふるさと塾を活用し、積極的に新規就農者の受入れを進めています。塾の入所にあたっては、推進委員会としての説明をはじめ、一週間程度、実習受入班の各農家で実習をしながら、地域の実状を説明し、就農者の意思を確認して入所を決定しています。入所期間は、一年以内を基本とし、その間に農業実習をしながら、当地の生活・文化を理解してもらうとともに、農地や

住宅の確保を行っています。

行政との連携

推進委員会と塾の近隣地区区長、地区住民代表者が籠ふるさと塾運営委員会を組織し、新規就農者の受け入れ態勢を取っています。那智勝浦町役場色川出張所が事務局をもち連絡調整を行っています。

他の組織・団体等との連携

新規就農者の実習受け入れ先として、色川茶業組合、那智勝浦町森林組合、色川花木組合、色川堆肥組合、色川有機同友会、色川無農薬野菜出荷組合などがあり、連携して定住に向けての実習が行われています。

活動の実績や活動の展開による効果

新規就農者は、地域住民との相互理解も深まり、区長をはじめ区長連合会長や消防団員、青年会等の地域組織の役員も務めるようになり、地域活動等も盛んに行われるようになりました。

平成十五年十月一日現在、新規定住者は、四十四世帯、百二十四名と地域全体の人口の二十五%を超え、この割合は益々大きくなっています。保育所、小学校、中学校の存続こそが、地域活性化の大前提と考え、若い夫婦を中心に新規定住が進み、過疎化の進む農山村に、子供

達の元気な声が響き渡る情景が生み出されています。在校児童・生徒二十八名の八割強が新規定住者の子供達であり、その子供の約半数が色川で誕生しています。このことから、いかに新規定住者が、地元根を下ろし、地域住民としての担い手となつていくかがうかがえます。

また、持続性の高い農業の推進として、色川無農薬野菜出荷組合を作り、組合員が直売活動を行ったり、田植え、稲刈り、茶摘みによる農業・農村体験交流活動、さらには、滝巡りなどが体験できるグリーンツーリズム活動等も行っています。今後の活動における課題や展望

新規就農者の農業形態の多くは、水稻、野菜、茶、梅などの有機栽培と自然養鶏等複合経営であり、販路の拡大が問題となつています。また、新規に就農あるいは定住する上で一番の問題は、農地の取得と住宅の確保であります。推進委員会が仲介者として、より一層の強力な連携のもと、活動を展開していかなければならぬと考えています。

防犯とまちづくり



松山大学法学部助教授

柳川 重規

治安の悪化とその原因

近年、我が国の治安が悪化していることは、多くの人の実感するところであると思われる。実際、平成一四年の刑法犯認知件数は二八五万件を超え、一四〇万件前後であった昭和期の約二倍となっており、数字にもこのことは、はっきりと現れている。しかも、過去五年間の犯罪増加数約八〇万件的のうち、路上強盗やひったくり、乗り物盗などの街頭犯罪と侵入犯罪の増加数が約六〇万件と、その大半を占めている(平成一五年版警察白書)。このような街頭犯罪や侵入犯罪は、一般の市民が、普通の日常生活の中で直接の犯罪被害に遭うという特徴があるために、その増加は、人々の「体感治安」を悪化させ、深刻な不安をもたらしている。

このように治安が悪化した原因として、不景気が長く続いていることであるとか、不法滞在の外国人が増えたこと、警察の捜査力が低下したことなどがよく挙げられるが、コミュニティが持っていた犯罪を予防する力が失われてしまったことも大きな原因であると考えられる。コミュニティの崩壊が叫ばれる現在、コミュニティの犯罪予防の力をいかにして回復するかが重要な課題となっており、ここに防犯とまちづくりの接点がある。

犯罪を予防する「コミュニティ」の力

コミュニティの持つ犯罪を予防する力といっても、なにも自警団などによる地域の自警活動を言っているわけではない。ここで言わんとしているのは、たとえば、不審者がうろろしているのをいぶかつて、地域住民が声をかけてくることを、空き巣が非常に嫌うという事実によって示されているところのものである。地域住民が互いに顔見知りで、日常的に挨拶をし合い、見知らぬ人間がうろついているのを見かけると、住民の方から積極的

に声をかけていくような地域、ゴミの収集日に合わせて住民がきちんとゴミ出しをしているような地域では、空き巣の被害は少ないと言われている。それはなぜか。このような地域では、住民が自分の住んでいる地域に関心を持ち、そうした住民の目(一種の監視の目)が防犯の効果をもたらしているためだと言われる。逆に言えば、治安悪化の大きな原因に、地域に対する人々の無関心がある、と言うことである。

こうした考え方は、理論的には「割れ窓理論(broken windows theory)」として知られているものである。建物の窓が一枚、何らかの拍子で割れたのを、そのまま放置しておく、そのうち残り

の窓もすべて割られてしまうという傾向が見られる。これは犯罪全般について当てはまり、何か一つ犯罪が起こっても、警察を始め他の人々もそれに適切な反応を示さなければ、「この場所では何をやっても構わないのだ」という意識が醸成され、治安が著しく悪化していくのだと、この「割れ窓理論」は言う。

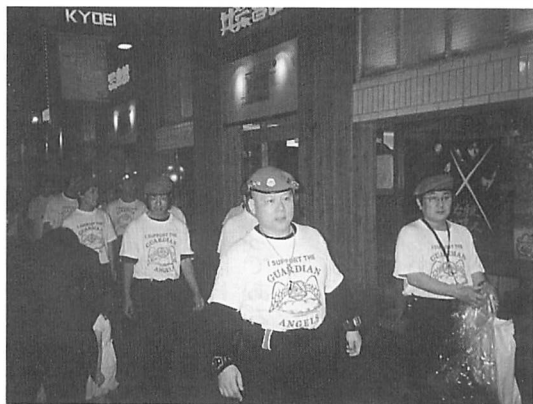
犯罪の原因は様々であり、どのような対応策が適切かも原因に合わせ変わってくるが、人々の「体感治安」を悪化させている街頭犯罪や侵入犯罪に対しては、コミュニティによる犯罪予防の取組みが有効であると考えられている。

犯罪に強いまちづくり

このようにコミュニティによる防犯ということが重要であるとしても、コミュニティは崩壊し、失われてしまったと言われる現在において、どのようにしてこれを実施していくのか、という疑問の声もよく聞かれる。確かに、近所付き合いや町内会・自治会の付き合いを煩わしいと感じ、このような繋がりを積極的に持とうとしない人が増えているのは事実であろう。しかし、近隣の人達との結び付きを強固にすることが、自分や家族の安全を守ることに繋がると知ったときに、それでも多くの人々は孤立したままの生

活を続けようとするのであろうか。御近所付き合いを大切にしなければ、安全な暮らしが保障されない時代に入ったのだと人々が自覚することが、コミュニティ再生の契機となるのではないかと思う。

もちろん、地域によつては、近隣の人々の繋がりを強固にするだけでは問題解決に至らないところもある。繁華街などは、その典型である。このような地域では、地域住民の努力に加えて、NPOなどのボランティアの助けや、行政による支援が必要である。この点、松山市では、ここ数年、大街道・銀天街での治安悪化が問題となつているが、問題解決に向け、まず、商店主が立ちあがり、それに呼応して松山市は「安全で安心なまちづくり条例」を制定し、大街道・銀天街を含む番町地区をモデル地域に指定してさまざまな支援を開始した。また、防犯・治安維持に関わる様々な活動を展開しているNPOの「日本ガーディアンエンジェルズ」の協力・指導のもと、「松山パトロール」というパトロールチームが平成一五年六月に発足するなど、ボランティア団体による夜間パトロールも積極的に取り組めるようになっていく。こうした取り組みが、今後一層の充実を見せ、また他の地域にも広がっていくことが望まれる。



日本ガーディアンエンジェルズ「松山パトロール」による大街道・銀天街のパトロール

コミュニティによる防犯といっても、大仰なことが考えられているわけではない。まずは近所の人達と挨拶し合い、自治会の行事などを通じて地域の人と知り合い、地域の結びつきを強めることが防犯上重要だということである。こうしたことが、地域住民による町内のパトロールであるとか、合同で行う落書き消し、他地域へのボランティア参加などの活動に発展していけば、より防犯の効果は高まると思われる。何にしても、自分達が治安回復の主役になるという意識のもと、ある意味当たり前の活動を地道に続けることが「犯罪に強いまちづくり」に繋がっていくものと考えられる。

引き算型まちづくりの事始め (十)

予算執行と決裁

十二月といえば、いずこの市町村も新年度予算編成の時期である。遅くまで時間外の勤務を強いられ、各課から要求される予算の取りまとめに追われる日々であろう。不況と財政逼迫の今日、収入と支出のバランスなど考えても仕方がないほどの状況は、財政の実務を経験していなくてもおよそ想像はつく。

それでも自治体は生きていくし、生き続けなければならぬ。逼迫した財政状態からの脱皮は町村合併に限ると、胸を張って盲進している自治体を見てみると、長年にわたって培った信頼なのか、首長への依存かは別としても、一見幸せな地域社会の側面を感じてしまう。

さて、長年の経験で、ずっと疑問に思っていたことの一つに、組織社会に生きる人間の、避けては通ることができないシステムに「決裁」がある。決裁とは、権限を持つているものが、部下の差し出した案の可否を決めること。(日本国語大辞典第七巻)とある。誰だつて分かっていることである。分かっているながら疑問視しなければならぬ決裁のジャンルに、予算から決算に至るまでの手続きが、あまりにも複雑かつ重複が繰り返される

ことに関して、引き算型まちづくりとしての検証ができないものかと、会計規則や要綱、財政法等の手続きは棚に上げての話題を提供したい。

予算要求の前には、新年度の事業計画や行政事務の管理計画といったものが策定され、この計画に基づいて予算の要求案がまとめられ、提出される。次に予算ヒヤリングと称して、財政当局への説明が求められ、地均的に各セクションの管理的な経費が配分される。さらに新年度の新規事業や、目玉となる継続事業にかかる理事者のヒヤリングへと査定が続く。この段階で新年度へ向けた施策の筋の合意ができあがり、議案としての素案が形成される。言葉を替えれば、新年度事業への事実上の理事者決裁でもある。行政施策の素案は、予算のヒヤリングに始まって、ヒヤリングの中で作られるといつてもおかしくはない。次は、議案としての成案づくりである。三月に開催される定例会は、自治体における一年間のまちづくりを決定する重要な議会だけに、理事者はもとより職員も一丸になって議案の成立を志す。議会議員も同様である。大きい自治体などは、ここまでの過程の中で、政権政党等の研究協議など

もおこなわれるのであろうが、特別な事情がない限りは、提案されたものが大筋で議決され、新年度を迎えることになる。

さあ、いよいよ新年度がスタートする。人事異動等で一新した部署があれば、前年度からの引継で思いを新たにしている部署もある。事業計画の実行である。ここからが本格的な決裁執行の始まりだ。今日的に決裁のあり方を経験してみると、上司は部下を信頼せず、目を通したくなるし、部下は責任を上司に委ねようとする体質が蔓延し、日常化し、常識化しているように思えてならない。今時一百万円の支払いのために、幾つの決裁印が要るのか、真剣に考えられたことはあるのだろうか。

職員に対する不信からか、権限の委譲はことのほか進んでいるように見える。予算等の執行権限にしても、個々の市町村ではまちまちであろうが、側聞するところでは助役、町長にその権限は集中しているようである。

事例として考えてみると、先ず、事業にかかる詳細計画案が決裁の対象になる。軽微なものから、首長と一緒に取り組まなければならない重要なものまで様々である。決裁という行為の全てを否定しよ

うというものではないが、無駄と思える領域が少なくないもの事実であろう。

そこで必要なものを消費しようとするときに「支出負担行為」を起こすことから始まるが、担当者、主任、係長、課長補佐、課長、助役と印鑑をそろえなければ軽微なものまで発注すらできない。また、内容をチェックし、吟味するための決裁印であるにもかかわらず、実態は吟味をしないままの承認の判を押してしまふ。上司は質的に権限を委譲したつもりでの押印かもしれないが。そのことよりも情けないのが、個々の押印は、決裁のためのものではなく、監査や会計検査のための書類の整備として機能しているところに問題を見出したい。

納品の後の支払いも同様である。電子決裁が常識になりつつある今日でも、自治体によっては、これらの支払いの証票づくりに、未だにカーボン紙を挟んで二重、三重の複写を取り、個々に関係管理者の押印を余儀なくされる職場すらある。このためにどれほどの手間が必要になるのか、上司が不在であれば手続きが日延べになり、そのためにどれほどの職員と時間が必要になるのか、真剣に考え直したいものである。

専決規程の見直しといったことは、事務の簡素化を語るときにはいつも組上に

は昇るが、大山鳴動鼠一匹で、大した成果は見えてこない。部下職員をして「性悪説」で見ているのか、管理監督を重視しての結論が優先するのか、自由闊達な行動への期待は見えてこない。

こうした実態への改善を指摘して返ってくる言葉は、「担当課の専権事務であり、口出し無用」「役場とはそういうことを事務として処理する所」「監査の指摘事項であるから」と、理由にもならない言葉で片付けられる。さらに、何よりも問い直されたいことは、こうした矛盾に対して動こうとしない組織人としてのマンネリ化である。嫌われてまで口を出したくないとした公務員体質は、住民サービスの本旨とした倫理観にも欠ける。理事者の責任だ、管理職の仕事だといって責任を転嫁しても始まらない。

こうした価値観で行政事務を管理している自治体同士が、町村合併をしようものなら、さらに決裁のための手続きは複雑化しそうであるがいかかなものであるう。

「入るを量りて出すを為す」は家計にだって存在する原理であるから、市町村がこの原則を守ることが当然であろう。が現実には、過疎と高齢化が進む自治体において、収入ばかりを見積もって

では何もできない。不足する予算の原資は地方交付税と起債と称する財源で賄わなければならないことは周知の通りである。数年前の我が町における町税の総額が約八億円であったときの、人件費と称する支出の総額が十三億円であったことを思い出す。不足する五億円は、当然のように交付税を原資としなければ帳尻は合わない。

住民への行政サービスが人件費によって賄われている実態は承知しなければならぬが、それは事務の管理のための人件費であるとすれば、簡素化へ向けて最大の努力を惜しむべきではない。人件費が予算総額に占める割合は決して小さいものではない。町役場や農協が地方における就業の場として最大の職場になってしまふのもうなずける。

決裁に要する人件費は、もつと別のまちづくりの原資として活用するための改革こそが、町村合併の前に取り組まれる事項かもしれない。今地方自治体は、戦後の五十有余年が一日の如しで考えられているようで、染みついた常識への問い直しを負の要因として発見し、引き算型まちづくりとしての検証に役立てたいものである。

内子町 岡田 文淑

五十八番札所仙遊寺の小山田和尚に勧められるまま、(財)えひめ地域政策研究センターが開催した平成十四年度地域づくりリーダー育成研修会に参加することになった。自己紹介では、りっぱな肩書のある人や、まちづくりの中心的人物として現役で活躍している人々に囲まれ、子供たちに空手を教えている、今治市空手道スポーツ少年団の北川です。」と言うとポツンと私一人場違いな感じがした。「来る所を間違えました。」と言うと皆の笑い声の中、愛媛大学の讃岐先生が、「いろんな人種が集まってこそ、いろいろなアイデアが生まれる。まちづくりとは人づくりです。」とおっしゃった。この言葉に力を得て一年間勉強する決意をした。

様々な企画で様々な団体と交流を深め、いつも肌で、じかに感じる事ができた。有意義でかつ楽しく研修できた事、スタッフの努力と研修生皆の協力に、感謝せずにはいられない。親睦会では、講演会では聞けない失敗談や面白いエピソードも聞くことができ、これもまたいい勉強材料となった。この一年私にはとても短く感じた。次の研修は、どんなテーマでどこへ行く?どんな人に会う?皆で企画

するのも、現地に行くにも楽しくて研修が待ち遠しかった。そして、何処へ行ってもまちおこしのリーダーや団員の熱い語りを聞き、白熱した意見交換会が持て、研修の度元気をもらって帰ることが出来た。その時感じたのだが、リーダーやその団体の中心的人物は、個性の強い情熱家が多かったように思う。

研修をふりかえって

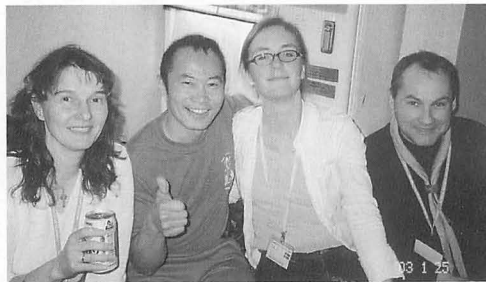


今治市
今治市空手道
スポーツ少年団
北川 猛

研修を重ねるうちに「自分の町もこんなふうに元気であってほしい。」「自分の町をもっと元気にしたい。」と思うようになってきた。と言っても私に特別なことは出来ないけれど、たとえ自分で企画出来なくても、企画した人のお手伝いくらいなら私にもできる。「自分にも必ず何か出来ることがある!」と思えてきた。

誰かが声を出さないと町は元気にならない!かといつて、どんないいリーダーがいても環境が整わなければ進まないし、それを支えるスタッフも必要だ。また、各団体間のネットワーク化も大切だ。共に相談相手となり、共に協力できるところがあると思うからだ。

私は今、今治市国際交流協会のボランティアスタッフとしてお手伝いしている。外国の人をサポートするだけでなく、今治の良さを彼らに知ってほしいし、私たち自身、外国の人たちと一緒に今治の良さを改めて見つめ直したい。まちおこしの原点は、まず郷土をよく知る事ではないだろうか。



大分で生まれ、松山で育った私は、高校進学の際、父の生まれ故郷である三間町に引越してきました。それから三年間、高校生の時期をこの町で過ごし、その後大阪の大学に進学したわけですが、町を離れて暮らしてみても、あらためて実感したことがあります。

三間町は私の「ふるさと」なのです。たくさん緑とたくさん星、あたたかい人達、おいしい野菜やお米……。癒されるんです。そんな町の良さをもっと自分でも味わいたいし、町外、県外の多くの人にも知ってもらいたいという思いから役場に入りました。

ですが、四月に配属先を聞いた時は正直「なんでだろう？」と思い、「私がかつていけるのかな」と思いました。七月十九日にオープンした道の駅「みま」コスモス館、その中にある「畦地梅太郎記念美術館・井関邦三郎記念館」が私の職場です。芸術に精通しているわけでもなく、特別興味があったわけでもないので、最初はとて不安でした。

しかし、新しく建てられた施設は私と同じピカピカの一年生。何もかもが初めての経験。これからここでいろんな人や出来事と出会い、共に成長していくんだ

と思うと愛着が湧いてきて、期待がこみ上げてきました。そして今、美術館と共に三間町発展のために頑張っています。畦地梅太郎記念美術館では三間町が誇る版画家故畦地梅太郎画伯の版画をはじめ、三間町出身の芸術家の作品およそ三百点を収蔵しており、年四回の展示替えを計画しております。

ふるさと



三間町
畦地梅太郎記念美術館・
井関邦三郎記念館

清家 朋代

併設する井関邦三郎記念館は、井関農機株式会社創業者である故井関邦三郎氏の農機具にかけた人生の軌跡に触れることができます。大正時代に使用されていた全自動すり機の複製も展示しており、現代の農機具しか目にしたことのない私たちには教えられることが多く、とても勉強になります。

また、物産コーナーでは、地域の特産品やお土産品を販売しています。特に人氣があるのが、地元でとれた新鮮な野菜です。朝も早くから、農家の皆さんがキヤリーいっぱいに入った野菜を持ってきます。私はそのおいしい野菜も好きですが、毎朝出会う皆さんの笑顔が大好きです。

レストランでは、町内の女性の方々が腕によりをかけて、地域の素材を活かした調理法で作った料理を出しているのです。体にもよく、とてもおいしいです。ランチタイムにはバイキングもあり、好きなものを好きなだけ選ぶことのできるのが好評です。

三間町では、近い将来、高速道路の開通、インターチェンジの開設も計画されており、これからどんどん発展していくと思います。いつまでも「三間町らしさ」を失わない「私のふるさと」であってほしいと願っています。そのため私にできることはほんの小さいことかもしれませんが、一町職員として、一町民としてできることからコツコツと頑張っていきたいと思っています。

“MY TOWN” うおっちゃんぐ

歩キ目デス & 足ラテス

第26弾

レクイエム青木ビル

八幡浜市旭町

岡崎 直司



昭和初期のオフィスビルが、また一つ町から姿を消した。八幡浜港に面して建つ、いや建っていた旧青木石油事務所ビル。これから、せめて鎮魂のウオッチング記事を書くこととする。

写真の如く、押し出しのいい、堂々たる構えの二階建て。でもこれが木造だと聞くと、大抵の人は驚く。昭和九年、八幡浜が「伊予の大阪」などと呼ばれ、活況を呈していた頃、港に向けて建てられた。オーナーは青木繁吉、高知県高岡村（現土佐市）出身の立志伝中の人物。明治十九年生まれの青木は、やがてランプ用灯油の販売から身を起し、同四十一年、時代の推移を読み取り青木石油店を開業。大正四年には振興著しい西宇和郡八幡浜町に進出、本格的な石油精製・販売業者として、いよいよ昭和五年には株式会社青木石油が誕生している。

この社屋建設は、それから間もなくということになるから、青木四十四歳、彼が文字通り油の乗り切った頃、栄光のワンシーンである。

建物内部に入ってみよう。東側に純和風の自宅が接続されていて、オフィス仕立ての洋館部分と、居住区のと館がセットになった建物である。南に面した門を入ると玄関、数奇屋建築の仕様で、一文



居宅との接合部

字葺きの瓦や、化粧垂木が目に入る。和館の方は、中庭が取られ、一、二階とも各部屋の建具や調度が品よくまとめられ、嫌味がない。部屋と部屋との仕切りにある境欄間（さかいらんま）、床の間の付け書院に見られる書院欄間には、それぞれ「竹に雀」や、「兜」、「鳳凰」、青木家の家紋である「剣カタバミ」など。中には、イスラム調にも見える植物紋様のものである。モチロン全てを紹介出来ないのが残念。

柱は杉の四方柱、敷居は桜材、床板は樺（けやき）などがバランスよく配



床(とこ)天井のおしゃれ

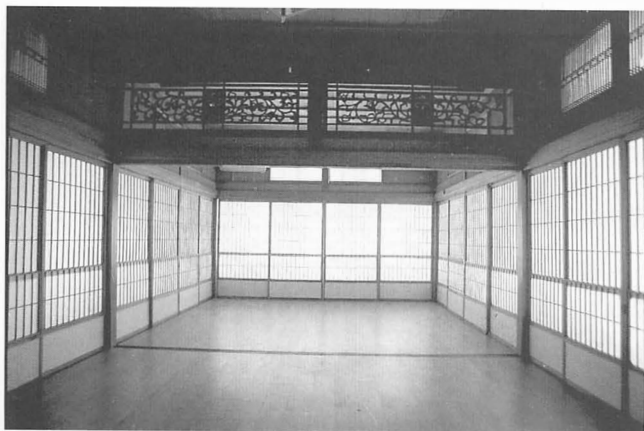
置され、棟梁のセンスはただものではない。残念ながら、笹山何某ということの聞き書き以外詳細が掴めないが、これだけの技を見せる職人のレベルは、地方とは言え、当時の豊かさを示す証でもある。外観、内観ともに一流の佇まいを身にまとい、この建物は、港八幡浜でも一目立つ存在であったに違いない。事実、戦時中には、当局のお達しによる戦時迷彩で黒くコーラルが塗られ、戦後間もなくまで、なかなか色が褪めなかつたらしい。

幸いにも戦災にも遭わずに残っていたのだが、しかし、齢七十を目前にして惜しくも解体されたことは、全国各地で地域資源の活用が連日話題に上る中で、言葉もない。現在の経営主体である太陽石

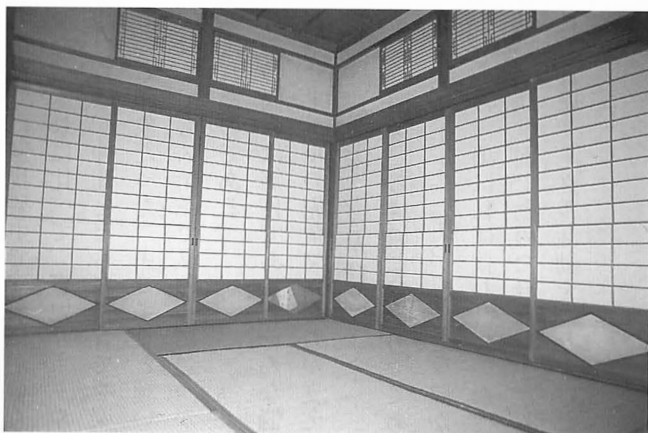


書院欄間 (二階)

油と地域との関係性においても、ある種不幸な展開になり残念至極。我が生地八幡浜は、一体何処へ行こうとしているのか、嗚呼！



シンプルな障子の美 (その1)



シンプルな障子の美 (その2)

ひめ 暖のかわら版

えひめのがんばるママの応援団!! (その1)

松山市 NPO法人 子育てネットワークえひめ

代表理事 山本 由美子

活動の原点は体験から

私は、平成三年に福岡から松山に嫁いできた。そして、親も友だちもない町松山で子育てがスタートしたのである。母親になることを心待ちにして過ごした十ヶ月間だったが、子どもが誕生し、母親となってみると、毎日の子育てはとても大変で、夫が出勤すると「わが子の命を一人で預かっている」というプレッシャーにつぶされそうになっていた。

当時、私に子育てを覚えてくれたのは、悲しいことに育児書!!子どもが泣くと育児書を開いては教えてもらった。しかし、子育ては育児書どおりにいかない。当然のことながら、マニュアルどおりにいかない子育てに不安になり、子どもが泣くと、私も涙が止まらなかつた。可愛いわが子をいつそのこと落としてしまいたい、そんな気持ちにもなったものだ。

孤独と不安な子育てに苦しんでいたときに、隣の奥さんが「育児サークル」を教えてくださいました。

近所の公民館に母親と子どもたちが十五組ほど集まって、手遊びや絵本、体操ととても楽しい時間を過ごしていたのである。私はあのとときの母親たちの笑顔が今でも忘れられない。当時の私はわが子



北条市の育児サークルにてクリスマス会

一人の子育てに無我夢中で、余裕が全くなかった。それに比べて、育児サークルの母親たちは、仲間とともに子育てを楽しんでいる印象だった。キラキラと輝いた笑顔はとてもステキで私の心にしつかりと刻まれたのである。

子育ての悩みは毎日である。そんな悩みを育児サークルの先輩ママたちが支えてくれた。「最近夜泣きがひどくて・・・」「そんな時期よ。ちよつとつきあつてあげたら。大丈夫よ。ずつとじゃないから・・・」その言葉に私は救われていた。それ以来、幼稚園で勤めた経験を生かして、私も育児サークル活動を盛り上げた

のである。

孤独と不安な子育て。そんな子育てに悩んでいる母親は、私だけではないはず。こんなに楽しい「育児サークル」をたくさんの方の母親に伝えたい！子育てと一緒に楽しみたい！

そんな思いから、平成八年、フリーパーに会員募集案内を掲載した。すると、毎日数十件の電話がかかってきた。友達が欲しい！出かける場所が欲しい！母親たちの悲鳴がたくさん寄せられ、私たちの育児サークルは一気に七十組の大所帯になったのである。

育児サークルからボランティア活動へ

平成十年、私たちの活動にチャンスが訪れた。愛媛県女性総合センターが創立十周年記念の企画イベントを公募したので。子連れで楽しめる企画を立てて、イベントを開催しよう！家に閉じこもって子育てしている母親たちとつながって、不安な毎日をいっしょに子育てすることで安心に変えていこう！メンバーの熱い思いをカタチにするときがやってきたのだ。

企画書作成や当日の準備、受付、進行など得意な分野でメンバーが分担した。小さな子どもをかかえながらイベント開

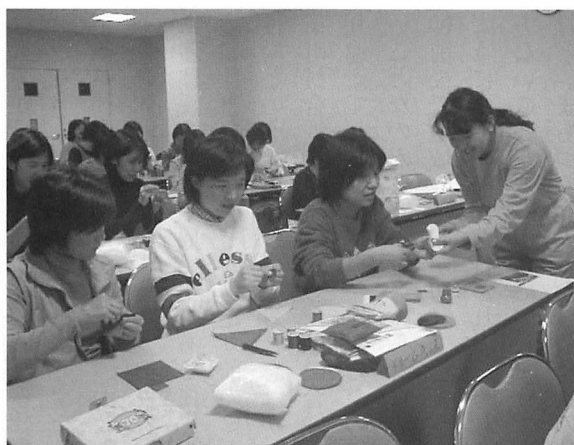


子供たちが狸に変身して松山城へ

催は大変なので、ボランティアさんにも協力をお願いして、たくさんの方のチカラを借りながら、最初のイベントは親子三百名の参加があり、私たちは充実感と達成感いっぱいでした。

それから、このイベントは「子育て交流会」という名称で、毎年開催するようになり、そのたびにメンバーたちは「〇〇さんすごいね。じょうずね」とお互いをほめ合って、評価して、腕を磨いていたのである。

地域の母親と母親をつなぐ場を愛媛県内各地で作ってきた。人づきあいの苦手な母親が、疎外感を感じないようにコー



子育てママたちの研修会風景

ディネート役を果たしてきた。その結果、私達の「子育て交流会」はいつもたくさんの方の親子が参加してくれた。

一方で、わが子の成長で育児サークルとの別れがやってきた。スキルアップしたメンバーたちとこのまま別れてしまうのはさびしい。そこから、ボランティア活動へと発展したのである。

平成十三年四月にNPO法人として愛媛県から認証を受け、新しい活動をスタートさせた。私たちは自分たちの孤独な子育て体験を生かして、「おやこのフリースペース」を開設した。

「岩松モデルは町並み保存」から

えひめ地域づくり研究会議運営委員

津島町 森田 浩二

今ここに「舞たうん」七十二号がある。そのなかの「卒業研究員レポート 随想 いい地域に向かつて」を読み返す。私自身が、平成十二・十三年度の二年間、えひめ地域政策研究センターに身をおき、志のあるたくさんのまちづくり人と出会う機会をえた新鮮な感動を寄稿している。思い出せば、「これまで地域への危機感や目標もなかったが、少し理屈がわかり自覚してきている自分自身に期待している。」と書いた気がする。あれから二年弱。自分はその思いをもち続け、地域に住んでいるか。この寄稿がその確認になればいいと思う。

えひめ地域づくり研究会議（以下研究会議）の事務局を預かったのが三年前。先輩諸氏に多くを学んだ。当会議は、愛媛での地域づくり運動のネットワーク構築がその使命だと認識している。一九八〇年代(財)愛媛県まちづくり総合センターとともに地域づくり運動の中心となり、愛媛をリードし全国に情報を発信してきた。その核になるべき運営委員会に今年度から参加させてもらっている。少しでもお役に立てることがあればいいのだが……。もつとも自分は先輩諸氏からまだまだ学びたいと思って参加している。地元に戻り、予想はしていたが市町村

合併の押し寄せる大きな波に、何のために自分が役場で公務員といわれる仕事についているか見失ってしまっていることが多い。だが私の雇い主なのか？ クライアントは誰なのか？ 当然「納税者」である住民である。雇い主である住民のために仕事をすること。その当たり前のことを役場という組織の中にと忘れかける。市町村合併を組織のためだけの合併と取り違えてしまう。本当に地域のためにいいことなのかどうか考えられない。合併前後で地域の時間が切れてしまうかのようになり、事業の消化が行われる。それを仕方ないことだとあきらめてしまう。あれほど「まちづくり人」から公務員の仕事のエッセンスを教えてもらったはずなのに。

今年研究会議が掲げたテーマは「遺すべきもの、伝えるべきこと」。激動の今、わが津島町でも「景色」も「技術」も保存していくことの難しさを痛感しながらも挑戦している。ご多分に漏れず当地でも、新しいものを造り拡大することへの憧れがいまだに強い。そのなかで岩松地区の「町並み保存運動」を展開していけないか模索している。持続可能な地域づくりの一つの方法として有効ではないかと思っている。今取り掛かりはじめた。

岩松は伊達藩の御用商人として宇和島から進出した小西家によって開かれ、新田開発によって増加した米、山間地で生産される木材、木炭、ハゼ、繭などの集積地の機能と交易のための港町として栄えた。以来海山の村々を束ねる町として形成され、幕末から明治にかけ隆盛を極め、現在の岩松の町並みが形づくられた。その町並みの保存を住民の運動と共に盛り上げたいと思っている。

きっかけは「酒蔵」。昭和四十年代にその使命を終えたかのように岩松の中心に佇む西村酒造場。商家としての本宅の土間に入ると広々とした店構えが当時の繁栄をしのばせる。格子戸を開け、トオリを抜けカマヤを過ぎると、酒造りをやめて三十年以上経っているとは思えないほど、蔵も道具も当時のままの酒造場に入る。右手の釜場、物置、洗い場は朱に染められた軒を連ねている。左側はなまこ壁の土蔵。そこを過ぎるとかつて大桶の洗浄や乾燥、仕込みの準備として使われていた中庭に出る。その突き当たりが麹室、仕込み蔵、貯蔵庫のある酒蔵群。見渡すとすぐにでも酒造りができそうな様である。どうかしてこの酒蔵群に目の目をあてることはできないだろうか。そう思った人たちがコンサートを開催し

たり、活用案を話し合ったりして、この蔵の存在を町内外に知らせていた。町としても疲弊した商店街の活性化の一助として酒蔵の活用を考え始めた。そこから酒蔵再生活用を一モデルとして終わらせず、岩松地区全体の景観保存がマスタープランであると考え、「町並み保存」に取組んでいこうと決心するきっかけになった。岩松にはその価値的要素や可能性が十分あるという自信を持ち始めた。全国に岩松モデルの町並み保存を示せるかもしれないとも。



岩松の繁栄を物語る代表的な商家西村酒造場

愛媛において「町並み保存」は、既に遠い先を進み、全国ブランドにもなった内子町八日市護国地区に学ぶことができない。町並み保存運動をはじめて三十年の月日が流れるという。まさに終わりのない地域づくり。その困難さは経過を聞くだけでも想像に難くない。しかし、「妻籠にできて内子に出来ないはずがない」と孤軍奮闘した行政マンがいれば、年間五十万とも六十万ともいわれる人々が訪れる「名所」になると今証明されている。まぎれもない事実である。

今自分がその行政マンになれるとも思わないが、少しでもここに住んでよかった、訪れてよかったと思われる津島町にするために、「町並み保存運動」をきっかけに日々精進していきたいと誓う。

町中が「食の博物館」

～宮城県加美町～

地域・家庭の「食」に目を向けた地域づくり

研究員 橋岡 勝一

依然として海外からの農産物の輸入が増え続け、日本の食料自給率は低下し続けています。そんな中、ここ数年、農作物の農薬問題や産地偽装、肉牛のBSE問題などで、「食」が注目され、「食」の安全性が求められるようになりました。ひとつの農作物の背景にあるつくった人・地域・生産過程が重視され、各地で地産地消やスローフード運動が広がってきています。

そんな身近な地域・家庭の「食」に目を向けて地域づくりに取り組んでいるのが、宮城県加美町（旧宮崎町）です。昨年夏、その活動の中心になっている宮崎町商工会を訪ねました。

行き止まりの町

加美町は昨年四月に中新田町・小野田町・宮崎町の三町が合併してできた町ですが、「食」を活かした地域づくりを始めたのは、宮崎町でした。

宮崎町は、宮城県の西北部、仙台市か

宮城県加美町



ら約五十kmの山形県境の豪雪地帯にある町です。人口は約六千人で、世帯数は千五百世帯。主な産業は米を中心とした農業と製造業です。

山形県境と言っても、奥羽山脈がそびえて山形には抜けられず、行き止まりの町です。温泉施設もつくりましたが、まわりの町村にもあり、なかなか観光客も来ません。また人口も毎年百人ぐらいずつ減っていき過疎化が進展。交流人口もなく、町民頼みの町の商業は危機的な状況でした。

「食の文化祭」から「食の博物館」へ

平成八年に宮崎町商工会で「まちおこし」事業を立ち上げ、平成九年から商工会を中心に県や町、商工会などの補助事業により地場産品や観光資源開発、まちづくり研究などに取り組みしました。その時、新しい特産品を考えるのではなく、今あるものを見直そうと、地域の農業、地域・家庭に伝わる「食」に目を向けました。まずは「我が家の味・家庭料理を

持ち寄ってみよう」と、平成十一年に最初の「食の文化祭」が開かれました。

これは、自分たちの力で、地域に根ざした食と生産、伝統を大切にしたい新しい暮らしをゆつくりと創造することから生まれた運動です。商工会の橋岡さんは、「過去にはかの団体がやったけどダメだった。無理だよと理解されなかった。でもそのことが逆にこの活動の原動力になった」と当時を振り返り、話されました。そして、町内の全二十八の行政区で説明会を開き、「普段食べているものでいいから」と説得した結果、地元の農産物を使った郷土料理から、ハンバーグなどの普段の料理まで約八百品もの家庭料理が集まりました。もちろん同じメニューが何点もありますが、それぞれにレシピがついていて、各家庭で味が違うので一つとして同じものはありません。これだけの料理が一堂に会するだけで圧巻です。

このほか会場では特産物の試食や展示販売が行われ、町の人口の二倍を超える一万五千人の来場者で賑わい、これをきっかけに地元のお母さん同士のコミュニケーションが始まり、農産加工グループも増えていきました。

平成十二年には千三百品を集め、商工会で季節や行事に応じて宮崎町の味を集



平成11年・12年に、出品された料理をすべて掲載した報告書を発行

めたお餅や朝ごはん、漬物セットなどの「手づくりギフト」の販売が始まりました。平成十三年には「見るだけでなく食べてもらう」と、一万一千食の家庭料理試食会を開催。「食の文化祭」は、単なる観光イベントではなく、地元の人と訪れる人々が「食」について語り合い、宮崎町の「食」に親しむ場、「食」や料理の新しい情報を受発信する場になりました。

平成十四年は、「食の文化祭」がグレードアップし「食の博物館(食のエコミュージアム)」として、町全体がイベント会場になり、春・夏・秋・冬の年四回開催。それぞれの時期に応じて開催する地域を変えながら、農業体験や農家の軒先見学などの体験メニューも取り入れました。このイベントにガイドとして参加されている方々は「食の学芸員」と呼ばれていて、ご自身の技をイキイキとした顔で訪れた人に教えているそうです。

これらの活動が認められ、「地域に根ざした食生活推進コンクール2002」で農林水産大臣賞を受賞しました。

住民の自主事業組織をつくる

宮崎食文化研究所

また、商工会が合併することになり、これまでの商工会主導から住民の自主事業組織にしたいこと、「農産物を定期的にはほしい」「農業体験をしてみたい」などの声にも応えるために、「宮崎町おいしさ開発委員会」が発足。「やれる人から」

「やれるものから」「今ここにあるもので」を合い言葉に、よい暮らし、食を楽しむ心地よさ、自然の恵み、田畑の力、人の知恵や工夫、伝統と現代の共存などをテーマに「宮崎町の食のおいしさ」を目指す活動を行う組織化を始めました。

昨年「宮崎町おいしさ開発委員会」が「宮崎食文化研究所」として活動を始め、農業体験ツアーを実施したり、地元の小学校の授業で「食の教育」を取り入れたり、市・産直、加工・特産品づくり、農村レストラン、情報発信などの実践に向けて三か年計画で取り組んでいます。地域・家庭の「食」を見直そう

昨年十一月に加美町になって初めての「食の博物館」が開かれました。家庭料理の展示や野菜畑での昼食・収穫体験な

どのバスツアーが行われ、町内外のたくさんの人たちが加美町の食文化を楽しんだそうです。

今回一番驚いたことは、加美町が地域の伝統料理や郷土料理だけでなく、家庭料理も地域資源に取り入れたことです。当たり前のことですが、「食」は人の暮らしの中ではなくてはならないものです。その地域ならではの食材があり、それぞれの家庭・地域にそれぞれの味・文化があります。

「食」にはただ食べるという意味だけでなく、「食」のまわりには人が集まり、そこに会話があり、コミュニケーションが生まれます。加美町の「食の博物館」でも「食」をテーマに人が集まり、参加した地域の人たちのひとりひとりが主役になっています。そして、今後も地域・家庭の「食」を活かした地域づくりを続けていくために、住民の自主事業組織である「宮崎食文化研究所」を中心に、地域のいろいろな分野のみなさん、地域外の理解者をより増やす活動をしています。「食」は、多くの地域の人たちが話題を共有できる絶好の地域資源です。身近にある家庭・地域の「食」を見直してみませんか。

地域づくり研究フォーラム 〈テーマ〉 21世紀の地域づくり～温故知新～

地域の時代です。

今日、各地で活性化への取り組みが行われています。その手法は様々ですが、多くの場合、すでに地域にある素材（自然・建築物・歴史・文化・食・人材など）に磨きをかけることで、成功しています。もともとある地域の力を発見することや、自立した考えを持つことは、地域活性化へ向けての第一歩です。

では、どうすれば表面化していない地域の力を見つけ出すことができるのでしょうか。また、「磨きをかける」とは具体的にどういうことでしょうか。このフォーラムでは、「温故知新」をテーマに地域づくりの手法を考えます。

■日 時 平成16年1月18日（日）10：00～17：00
 ■会 場 コムズ（松山市男女共同参画推進センター）
 松山市三番町6丁目4番地20

■参加料 無料

■内 容 10：00～ 開会
 10：15～ 基調講演 渡辺均 氏（株式会社総合市場研究所代表取締役）
 「地域地場産業の振興とマーケティング～稼ぎを生み出す技術～」

11：30～ インタビュー
 13：00～ 分科会

①いっしょにさがそう郷土の知恵～段々畑の営みに学ぶ～

コーディネーター 松波龍一氏（松波計画事務所代表）
 情報提供者 石垣スペシャリスト／現在段々畑で農業をしている方
 資料提供 藤田圭子氏（早稲田大学生）

②集う喜びを見つけよう！～新しいコミュニティ空間づくり～

コーディネーター 前田眞氏（邑都計画研究所代表取締役）
 情報提供者 浅沼裕子氏（清水小空き教室活用事例） ・ 森忠士氏（松山中央商店街連合会事務局長：商店街空き店舗活用事例） ・ 庚申庵活用関係者の方（古建築の活用事例）

③見つめようふるさと～次世代へ継ぐ地域の歴史・文化・慣習～

コーディネーター 森正康氏（松山東雲短期大学助教授）
 情報提供者 ゆげ女性塾（弓削町）／かめさん（三瓶町）／酒井孝氏（川内町）

17：00～ 閉会

■問い合わせ・申し込み
 財えひめ地域政策研究センター（担当：奥山）
 TEL：089-932-7750／FAX：089-932-7760 E-mail info@ecpr.or.jp

■主 催 地域づくり研究フォーラム実行委員会・財団法人えひめ地域政策研究センター
 ■後 援 NPO 法人えひめ NPO センター

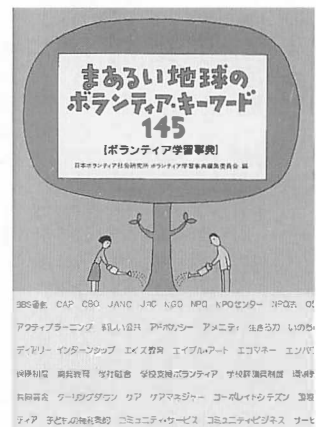
●まあるい地球のボランティア・キーワード145

【ボランティア学習事典】

日本ボランティア社会研究所ボランティア学習事典編集委員会・編
 春風社出版 2,500円（税込み）

・現場に即したキーワード集！

身のまわりの問題から地球規模の課題まで、関連する用語をまとめ、最新の活動状況を踏まえて解説！ 各方面の第一人者による用語解説は、これまでのボランティアの関する疑問に的確に答える。ボランティア活動の具体的な場面でぶつかる諸問題に対応できる、初の本格的キーワード集。



えひめ地域づくり研究会議フォーラム2004
テーマ 『遺し伝える活動者のための集い 2004』

今年度、えひめ地域づくり研究会議では「遺すべきもの、伝えていくべきこと」をテーマに活動しています。今回の年次フォーラムでは、そうした活動を実践されているグループにお集まりいただき、情報交換・人的交流の場にしたいと考えています。

これまでの基調講演・パネルディスカッションというスタイルではなく、歴史景観と環境のジャンルの10グループからの活動発表と、個々のグループの活動・問題点を意見交換するスタイルのフォーラムです。

ぜひご参加いただき、今後の活動における刺激材料していただければと思います。

■と き 平成16年1月24日(土)

■と ころ えひめ共済会館(松山市三番町5-13-1)

■プログラム 13:00～ 受付
13:30～ 開会
13:40～ 地域ミニフォーラム報告
14:10～ 日本ナショナルトラストからの挨拶と活動紹介
14:25～ 活動者からの報告「愛媛の遺し伝える活動の現況は」
(環境・歴史景観のジャンルから10グループ・10分ずつ)
16:15～ 講演
米山 淳一 氏(日本ナショナルトラスト)
17:00～ 意見交換
17:30 閉会
18:00～ 交流会

■参加費 フォーラム1,000円 交流会5,000円(希望者)

■申し込み えひめ地域づくり研究会議事務局(えひめ地域政策研究センター内)
TEL089-932-7750 FAX089-932-7760
E-mail: info@ecpr.or.jp
平成15年1月16日(金)までに

BOOK INFORMATION

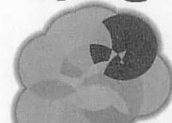
●長浜物語 町衆と黒壁の15年

出島二郎・著 特定非営利法人まちづくり役場出版
1,800円(税込み)

・黒壁を立ちあげたものは何か?

滋賀県長浜市。黒壁のまちづくりで有名なこのまちに、この秋、NPO法人として「まちづくり役場」が新しく設立された。黒壁、北近江秀吉博覧会、まちづくり役場。黒壁に代表される、長浜のまちづくりはどのように生まれたのか、これからどのように展開するのか。まちづくり関係者、必読の書。

十五年の町衆と黒壁の物語



里界を立ちあげたものは何か？
長浜町衆の活力の源泉をさがして歩いた旅の記録。ここに、まちづくり運動の光と影がある。次のシナリオ・ライティングへのテキストがある。
NPO法人まちづくり役場(株)発行

出島二郎

● 媛のくにフラッシュ ●

ゆらり内海

内海村

南宇和郡内海村が国道56号線沿いの須の川公園の向かい側に、浴場やレストランを備え、こじんまり落ち着いた観光施設「ゆらり内海」をオープンしました。

浴場は宇和海の深さ二十mの海水を濾過した「塩ぶろ」とマイクロバブルで白濁させた天然水の風呂が楽しめます。

また、レストランでは地元特産のヒオウギ貝や内海で育った「由良の媛っこ地鶏」を使ったメニューを用意し、二階の休憩室からは公園と宇和海をゆっくり眺めていただけます。塩風呂にゆ～らり入っておいしい料理を食べに、ぜひお越しください。(地鶏だしラーメンは一押しです。特に風呂上りには最高ですよ!)



支配人から

ごぶさたしております。以前「ローズ館奮闘記」で舞たうん(VOL67~69)におじゃまさせていただきました山口です。今回はバラ屋さんではなく、南の海のお風呂やさんになりました。おいしい真珠パウダー入りアイスクリームも作ってみました。媛っ子地鶏のスモークチキンや地鶏のお肉も販売しております。小さくておしゃれな施設なので、是非お越し下さいね。

営業時間：平 日 午前11時から午後10時
土・日・祝 午前9時から午後10時

休館日：木曜日

問い合わせ：ゆらり内海 TEL 0895-85-1155
E-mail: yurari@eos.ocn.ne.jp

入浴料金 大人 400円、小中学生 200円、
65才以上 300円

印刷／三創印刷株式会社

(財)えひめ地域政策
研究センター

発行／平成十六年一月一日

TEL 089(932)7750

FAX 089(932)7760

まちづくり活動スタッフ

(財)えひめ地域政策研究センター

松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階

〒79010003

編集係までお寄せください。
内容についてはご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に「舞たうん」

*** ** ** ** ** (梅村)

センターに来て十ヶ月が経ちました。「まちづくり」という何か漠然とした、得体の知れない、魅力のある世界に、足を一歩踏み込んだものの「こんな世界があるのか!」という驚きと、自分が行政に携わりながら「地域」への想いが不十分であったことを改めて感じる日々でした。その驚きと反省の中で、何か自分の中の意識の変化に期待しています。
そんな中で、あつと言う間に新年を迎え、苦勞の末なんとか舞たうんの発行に漕ぎつけました。新年を飾る表紙には、初日の出を描いていただきましたが、日の出の輝きに負けないように、今年が自分自身のまちづくりに対する飛躍の年となるよう精進していきたいと思えます。